

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 7 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2005～2008

課題番号：17520126

研究課題名（和文）

改造社を中心とする20世紀日本のジャーナリズムと知的言説をめぐる総合的研究

研究課題名（英文）

Research on the Relationship between Journalism and Intellectual Discourse in Twentieth-Century Japan: The Case of the Kaizosha Publishing Company

研究代表者

松村友視（MATSUMURA TOMOMI）

慶應義塾大学・文学部・教授

研究者番号：20181753

研究成果の概要：

慶應義塾大学三田メディアセンターに寄贈された改造社関係資料の整理・調査を行い、同資料のデジタル・アーカイブ化に貢献した。また、近現代の日本文学・中国文学・メディア史・思想史を専攻する研究者による共同研究プロジェクトを立ち上げ、改造社にかかわる実証的な研究を行う他、20世紀の前半期に日本語の雑誌や書籍が、列島の「外」において、どのように受容され、どんな作用を及ぼしていたかを明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	1,500,000	0	1,500,000
2006年度	1,200,000	0	1,200,000
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	200,000	60,000	260,000
年度			
総計	3,500,000	240,000	3,740,000

研究分野：日本文学

科研費の分科・細目：文学（日本文学）

キーワード：日本語文学、メディア論、ジャーナリズム、旧植民地、出版研究

1. 研究開始当初の背景

従来、日本語の文学言説にかかわる研究は、考察の対象となるテキストの確定と、内容の精読を通じた解釈学的な検討を軸に展開されてきた。その反省から、近年は、情報の調整弁としてのメディアの役割に注目する研究が様々に展開され、多くの重要な知見がもたらされている。しかし、一方で、言説の生産者と消費者の間に介在する

すべての行為者を「メディア」と捉えることで、言説の生産・流通・消費に参与する利害関係を同じくしないエージェントや、そもそもそれらを可能にしている法的・政治的・経済的な土台への言及がおざなりになってしまう傾向があった。

以上の認識を踏まえ、本研究は、2004年5月に慶應義塾大学に寄贈された改造社関係資料の調査から出発、日本語による知的言

説を経済的に下支えした活字メディアの功罪について、総合的に検討することを目指した。これまでの出版事業者にかかわる研究は、多くの場合、著作者や編集担当者の記憶や回想に依拠するケースが多く、実証的な検討を欠く憾みがあった。本研究では、出版社の内部資料を活用できる強みを生かし、半ば神話化されて語られている歴史的な事態にかかわる実態の解明に努めた。また、改造社の活動が左翼言説を中心に、アカデミズムとは相対的に自律した独自のジャーナリスティックな知の現場を作っていたこと・改造社が日本列島以外の地域や、日本語を第一言語としない読者を市場と考えていたことにも着意した。

2. 研究の目的

書籍・雑誌資料を含む膨大な改造社関係資料の調査を行い、資料目録の作成やデジタル・アーカイブの構築等、研究資料としての公開・公共化に向けた作業を実施する。また、改造社資料の検討から、20世紀前半期における日本語の知的言説の生産・流通・消費について、日本及び日本の旧植民地地域における様相を検討する。とりわけ、以下の問題意識にもとづき、具体的な調査・研究を進めていく。

(1) 戦前・戦中・戦後の言論統制の連続と断絶について。出版社の内部資料を活用し、とくに戦前・戦中の検閲、言論統制の実態を明らかにする。また、その成果を、敗戦後のGHQ検閲の様相と比較・検討する。

(2) 旧植民地における日本語言説の流通と受容について。いち早く「外地」を市場と認知した企業活動を展開していた改造社の編集や広告にかかわる戦略を検討することで、旧植民地地域において日本語言説がどんな人々に・どのようなかたちで受容されていたのか、それらが結果としてどんな役割を担ってしまっていたかについて考察する。

(3) 改造社は、原稿料・印税など、著作者の経済的な状況の改善に大きく寄与した出版事業者として知られている。文学に限らず、日本語の知的言説は、アカデミズムとは相対的に自立した商業的媒体を舞台に展開されてきた歴史を持つ。著作者との金銭にかかわる交渉の実態を明らかにすることで、日本語で書かれる知的言説を下支えした重要な行為者として、出版事業者を位置づけていく。

3. 研究の方法

上記の研究目的を実現するために、以下の点に留意した活動を行った。

(1) 領域横断的な考察を可能にする研究組織の構築。

狭義の文学だけでなく、人文・社会科学の知を広範囲にカバーした改造社の活動の意味を十全に捉え、その問題性を議論するためには、専門領域を異にする多くの研究者の参加が不可欠である。また、そもそも研究の前提として、改造社にかかわる膨大な資料の整理と内容の確認を速やかに行う必要があった。

そのため、(松村が専攻する)日本近代文学の研究者だけではなく、近現代日本の出版文化・メディア史・思想史の研究者や、中日比較文学、植民地期の台湾・朝鮮に関心を寄せる研究者を研究分担者・研究協力者として、多角的な検討を可能にする体制を整備した。

加えて、改造社資料の研究資源としての整理にあたっては、研究分担者・研究協力者と、松村や松村の指導する大学院生・ポストドクターとが連携して作業できるように配慮した。このことは、実際の調査を担当した大学院生・ポストドクターの視野と知見を広げるという意味で、重要な教育的意義を持っていた。

(2) 研究資料の保全と共有化。

本研究が主に依拠した改造社資料には、紙質の劣化が著しく、大学図書館のような公的機関での保管が難しいものも多く含まれていた。また、本研究のように、所属する研究機関が異なる複数の研究者がかかわるプロジェクトにあっては、特定の大学図書館にのみ資料が集中することは、資料へのアクセスという意味で、好ましいとは言えなかった。そこで、改造社資料を一括して借り上げ、科学研究費の資金を活用し、外部に別置倉庫を確保した。プロジェクトとして資料を一元的に管理し、研究組織内での共用化を図った上で、デジタル・データの採取や、資料目録の作成作業などを実施していった。

(3) 公開研究集会の開催。

研究資源としての改造社資料の意義に鑑み、研究にかかわるメンバーの問題意識の深化と、資料を媒介とした研究者間の知的交流を実現すべく、公開の研究集会を開催した。その中では、改造社資料の調査報告を行う他、外部からも講師を招聘し、改造社をめぐる研究の学際的・領域横断的な可能性や、内容的・地域的な広がりについて、

意見交換を行った。さらに、問題意識を共有する他の科研費プロジェクトとも連絡をとりあい、講演会や研究集会を共同開催する等、連携・協力を努めた。

(4) 旧植民地地域における現地調査。

改造社の出版活動・広告活動が日本列島の「外」に及んでいた事実を踏まえて、1920～1930年代の台湾・韓国における日本語書籍流通の実態を明らかにすべく、同時代の日本語資料の収集と調査を行った。2006年には、研究協力者4名が台湾・台北に出張、台湾大学図書館・国立中央図書館台湾分館での調査を実施した。それ以外にも、研究組織のメンバーが、台湾・韓国の各大学図書館・公立図書館において、同種の調査活動を実施した。

4. 研究の成果

4年間の研究活動で得られた研究成果は、大略、以下の3点に区分できる。内容の細目と合わせて記述する。

(1) 改造社関係資料のうち、冊子体（書籍・雑誌）資料について。

改造社の創業者・山本実彦による書き入れを含む書籍や、著作者が署名した山本実彦宛の献呈本を発見、整理した上で、それらの目録を作成した。また、改造社内編集実務に活用されていたと思しき書き入れを含む雑誌を発見し、整理した上で、それらの目録を作成した。

とりわけ、後者にかんしては、1920～1930年代の著名な総合雑誌の編集プロセスをうかがわせる資料として、さらなる検討が必要である。

(2) 改造社関係資料のうち、冊子体以外の資料について。

主に同社の出版活動にかかわる資料の調査と分析を行った。その成果は、公開の研究集会において報告された他、一部は、学会誌等で翻刻・紹介がなされた。具体的な成果としては、以下の4点を挙げることができる。

改造社の会計にかんする記録の調査によって、従来は当事者・関係者による証言や回想に依拠していた、出版事業者と著作者との経済的な交渉の実態が明らかになった。このことは、言説の（再）生産を可能にする著作者の経済的な諸条件にかかわる通史的な検討に欠かせない、重要な成果であったと言えるだろう。

改造社の広告出稿についての資料を検討することで、当時有数の広告主だった改

造社が、各種の広告媒体をどのように評価し、いかなる広告・宣伝戦略を採用していたかが明らかになった。また、改造社の事業が、日本帝国の植民地だった地域や、軍事的・経済的な勢力圏と見なされる地域の人々を含めた、多様な日本語話者を念頭に構想・展開されていたことの資料的な裏付けが得られた。この成果は、今後、各地域で実際に掲載されていた広告の内容分析と合わせて、台湾・韓国の近代文学研究・文化研究との対話を期待させるだろう。

改造社の経営・経理にかんする資料の調査によって、第二次大戦期、とくに1944年の「自発的廃業」前後の経営環境・経営状況が明らかになった。「横浜事件」を直接の引き金とした、中央公論社・改造社の「自発的廃業」は、第二次大戦下における言論弾圧の象徴的事例と位置づけられてきた。しかし、このとき、改造社の内部では、戦争の終結を見越して、社の内外を意識したたかな駆け引きがひそかに展開されていたのである。戦時下に構築された「総力戦体制」が、敗戦後の日本の経済復興に重要な役割を果たしたことが指摘されているが、改造社の事例は、出版事業者における戦中・戦後の連続と断絶を考える重要な参考資料となるだろう。

改造社長・山本実彦の活動と業績について、資料に依拠した検討を行った。山本は、ジャーナリストとして出発、メディア企業家に転身したが、その一方で、議会政治家としての活躍を強く念願していた。敗戦後の1946年には、中道政党である協同民主党の委員長に就任している。

本研究では、改造社創業以前の山本の履歴に注目し、いくつかの新資料を発見・紹介した。また、ジャーナリスト兼企業家としての山本の経験や思想について考察し、20世紀前半期のメディア・ジャーナリズムと政治との人的なかかわりや、さまざまなチャンネルを通じた情報の流れにかんする検討を行った。

(3) 改造社を含めたメディア企業の存在と、同時代の知的言説とのかかわりについて。

本研究では、活動期間中に10回の研究集会を開催、22名の研究者が、それぞれの関心に依拠した研究発表を行った。そこでは、改造社資料にかかわる発表以外にも、20世紀前半期の日本語による知的言説の生産・流通・消費にかんする、多くの知見が得られた。いずれの論点も、現在の研究の前線と言える内容であり、今後の進展が期待できる。以下、4点に分けて記述する。研究集会での発表を招請した研究組織外の研究

者については、カッコ内にその所属機関を示した。

検閲と言論統制について。戦前・戦中・戦後の一時期まで、日本には出版物検閲が存在したが、それらは、一般的な意味で言説の生産者が乗り越えるべきハードルであると同時に、ある種の言説を産出する環境としても機能していた。浅岡邦雄は、とくに研究が遅れている、20世紀初頭の内務省警保局による出版検閲について、千代田区立千代田図書館で発見された旧内務省所蔵本(内務省委託本)の資料を活用しつつ、特定の解読格子によってテキストの読みが決定づけられる検閲の場が、同時に、揺らぎを持った独特な読書空間でもあったと論じた。また、プランゲ文庫資料を対象とする研究の進展は、敗戦後のGHQによる検閲の実態をあらわにしたが、一方で、戦前・戦後において検閲の主体が交替し、事務手続きや検閲の実務も大きく様変わりしていたにもかかわらず、検閲を受ける側の意識や行動にさほど変化が見られない、という論点の重要性も、改めて理解された。

なお、改造社の出版事業と内務省検閲とのかかわりをめぐっては、紅野謙介が、雑誌『改造』に発表された中里介山の歴史小説「夢殿」に対する処分を契機とした、検閲制度改正運動の盛り上がり、円本ブームの中での文学者のプレゼンスの高まりとの同時性を問題化し、出版事業者の宣伝活動に応じた文学者たちのメディアへの露出が、同時に、書き手としての能動性を行使するための条件づくりにもなっていた可能性を指摘した。

北米・南米地域での日本語書籍の流通とリテラシー環境について。日比嘉高(京都教育大学)は、研究集会での報告者として、北米地域における日本語書籍の流通と販売の実態をたどることで、日本語話者がマイノリティである場所での日本語リテラシーの保持と再生産がどのように展開されていたかを考察した。エドワード・マック(ワシントン大学)は、同じく報告者として、ブラジル・サンパウロに拠点を構えた遠藤書店の事業を紹介、日本語書籍の旅のありようをたどり直す他、移民地の日本語新聞が掲載した「植民地文芸」にかかわる言説を発掘、移民した日本語話者たちが、他の帝国の植民地に移り住んだ列島出身者やその子どもたち、日本語を第一言語としない植民地出身者たちとの相対的な関係において、揺動的なアイデンティティを模索していたこと、遠隔地ナショナリズム(ベネディクト・アンダーソン)と現地の社会的な共同性、移民社会の想像的な紐帯とのはざままで葛藤を抱えていたことを考察し

た。

1940年代前半期の上海における日本語言説の政治性をめぐって。杉野元子は、堀田善衛の小説『漢奸』の登場人物「アンドレ」のモデルとされる詩人・路易士(紀弦)の経歴と、路にかんする日本人側の記録、路当人の発言とを交錯させることで、単純に対日協力者 漢奸 と見なされがちな路の文学活動を、中日間の戦争状態と中国国内の政治的混乱とを所与の条件として引き受けた上での、ある種の能動性・行為者性をはらんだものとして再評価した。大橋毅彦(関西学院大学)は、上海で発刊されていた日本語新聞『大陸新報』の紙面を手がかりに、都市空間としての上海が、さまざまな政治的・党派的・社会的な敵対関係が複層化し、十重二十重にも策謀を読み込むことができた場であったことを指摘した。そこでは、あらゆる行為が多義的に解釈されてしまうがゆえに生じる空隙や、行為を解読する文脈の過剰が逆に行為の決定不能性・意味に対する無頓着さをもたらしてしまうことで、思いも寄らぬ文化政治的な出来事性が生じる余地が存在していたことを論じた。

改造社の事業と東アジア地域の日本語言説とのかかわりについて。和泉司は、改造社の創業10周年記念企画として発表された「改造新人賞」が、同時代的には後発の芥川賞との対抗関係にあった事実注意到を促した。また、同賞は、芥川賞同様に、あきらかに 外地 文学に高い評価を与えているという暗黙の理解が存在していた。そのことは、賞の選評や最終候補作のタイトル等の断片的な情報に加え、編集部員たちによる内部選考のみという条件とも重なって、応募者の側に、いわば「傾向と対策」として内面化されていたと論じた。一方、高榮蘭は、1932年の改造社長・山本実彦による朝鮮・満州視察旅行が、円本ブーム後に収縮した自社の出版物市場の再構築を論む『改造』本誌や改造社の営業戦略と不可分のものであったことを明らかにした。さらに、日本列島内のみならず、朝鮮においても左翼的な言説の紹介者として著名であった改造社の活動が、左翼言説を商品化し、それを受容=消費に供する行為によって資本の(再)集中を展開していたこと、そのことが、同時代の朝鮮において左翼言説の担い手が民族資本と取り結んだ関係とある種の並行性を保ちつつ、同時的に生起していたという論点を提出した。

なお、円本ブーム後の改造社の事業の行きづまりについては、戸家誠が、改造社出版物の特価本としての販売状況を傍証に、検討を行った。

この他、改造社関係資料は、慶應義塾大学図書館監修のもと、DVD資料としての刊行が企画されている。図書館を主体として設置された資料刊行委員会に、松村、紅野、五味淵が参加、研究組織に加わったメンバーによって、目録の提供や書誌情報の作成等が行われる予定である。本研究は、当初から資料の公共化とアーカイブの構築を目標に掲げており、科学研究費受給期間には間に合わなかったが、のちの研究に接続する土台を作るという目標は達成できたと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 9 件)

五味淵典嗣、山本実彦年譜考 『東京毎日新聞』時代を中心に、大妻国文、第40号、97～113頁、2009年、査読無

和泉司、『改造』懸賞創作の行方 さまよえる 懸賞作家 と翻弄されるテキスト、三田國文、第47号、37～52頁、2008年、査読無

和泉司、懸賞当選作としての「パイパイのある街」 『改造』懸賞創作と植民地文壇、日本台湾学会報、第10号、119～140頁、2008年、査読有

黒田俊太郎、三浦卓、旧改造社資料の概要と可能性、昭和文学研究、第56集、189～192頁、2008年、査読有

五味淵典嗣、旧改造社関係資料から何が見えるか メディアという表象とイデオロギー、日本近代文学、第77集、211～221頁、2007年、査読有

紅野謙介、山本実彦旧蔵・川内まごころ文学館所蔵『改造』直筆原稿研究について、日本近代文学、第77集、197～202頁、2007年、査読有

和泉司、田郷虎雄「印度」とその後 懸賞作家 と 戦争 と 文壇 と、三田國文、第46号、25～42頁、2007年、査読無

五味淵典嗣、『婦人公論』のメディア戦略 円本 以後の出版流通の観点から、大妻女子大学紀要・文系、第39号、51～72頁、2007年、査読無

黒田俊太郎、『改造社印税率の記録』とその意義、三田國文、第44号、105～142頁、2006年、査読無

[学会発表](計 3 件)

高榮蘭、帝国日本における出版市場の再

編とメディア・イベント 「張赫宙」を通してみた1930年前後の改造社の戦略(発表・原稿:韓国語) 国際韓国文学/文化学会(INAKOS)シンポジウム:資本の循環とニューメディア・テクノロジーの力学関係

韓国近代文学のトランスナショナリティ、2008年11月14日、延世大学校(韓国)。

高榮蘭、交錯する活字文化と欲望される「朝鮮」 崔承姫と張赫宙の座談会を手がかりに、日本大学学術フロンティア推進事業研究集会「アーカイブス、その歴史と展望」、2007年7月15日、日本大学文理学部。

五味淵典嗣、出版資本の文化研究 旧改造社関係資料を手がかりに、慶應義塾大学国文学研究会、2005年11月12日、慶應義塾大学。

6. 研究組織

(1)研究代表者

松村 友視 (MATSUMURA TOMOMI)
慶應義塾大学・文学部・教授
研究者番号: 20181753

(2)研究分担者

五味淵 典嗣
(GOMIBUCHI NORITSUGU)
大妻女子大学・文学部・専任講師
研究者番号: 10433707

(3)連携研究者

杉野 元子 (SUGINO MOTOKO)
慶應義塾大学・文学部・教授
研究者番号: 70226447

紅野 謙介 (KONO KENSUKE)
日本大学・文理学部・教授
研究者番号: 20195671

浅岡 邦雄 (ASAOKA KUNIO)
中京大学・文学部・准教授
研究者番号: 20454358

(4)研究協力者

高 榮蘭 (KO YOUNGLAN)
東京大学・グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター(UTCP)」
特任研究員

小向 和誠 (KOMUKAI KAZUMASA)
早稲田大学高等学院・明星学園高等学校
・非常勤講師

黒田 俊太郎 (KURODA SHUNTARO)
慶應義塾大学大学院・文学研究科・博士

課程

和泉 司 (IZUMI TSUKASA)
慶應義塾大学他非常勤講師

三浦 卓 (MIURA TAKU)
中央大学附属高等学校・非常勤講師

大澤 聡 (OSAWA SATOSHI)
日本学術振興会特別研究員 P D

尾崎 名津子 (OZAKI NATSUKO)
慶應義塾大学大学院・文学研究科・博士
課程

柴野 京子 (SHIBANO KYOKO)
東京大学大学院・学際情報学府・博士課
程

高島 健一郎
(TAKASHIMA KENICHIRO)
名古屋大学大学院・文学研究科・博士課
程

戸家 誠 (TOYA MAKOTO)
出版文化研究者